

特定非営利活動法人 碧いびわ湖

活動レポート&事業ビジョン

2018年度版



2017年5月28日 総会&碧いびわ湖フォーラム 西の湖のほとりにて

子どもと湖が笑ってる未来へ

碧いびわ湖

碧いびわ湖は、2017年度も様々な活動を展開することができました。ご参加・ご協力を賜りました方々へ、心からの感謝を込めて、その成果を報告いたします。あわせて、今後の事業ビジョンも記しました。碧いびわ湖が旧環境生協の事業を継承して来年で10年。一人一人の思いと力を活かし合い、循環し、自治し、持続する暮らしをつくる、碧いびわ湖のチャレンジへのご参加とご協力を、引き続きお願いいたします。 2018年5月 代表理事 村上 悟

【買い物づくり】 せっけん運動40周年！

1977年に起きたびわ湖の赤潮とせっけん運動から40年を機に、「ぐるぐるびわ湖プロジェクト」の6団体で「あらう。えらぶ。未来のセンタク 2017キャンペーン」を展開しました。



2017年7月29日 琵琶湖のせっけん運動40周年記念集会を開催しました



感謝状を武村正義元知事から贈呈いただきました



三日月知事、若手漁師中村さんらとのディスカッション



びわ湖のせっけん運動の仕掛け人、元湖南生協理事長の細谷卓爾さん（右）と元環境生協理事長の藤井絢子さん（左）も参加



リサイクル粉せっけん「びわ湖」と液体せっけん「ゆう」も、琵琶湖畔に並びました

●びわ湖のせっけん運動 40 周年

“せっけんを入りに、循環型の暮らしを広める”を共通目標とする「ぐるぐるびわ湖プロジェクト」の6団体で、「びわ湖のせっけん運動 40 周年記念・未来のセンタクキャンペーン」を展開しました。7月に開催した40周年記念集会では、武村正義元知事と三日月大造知事にもご参加いただいて、せっけん運動の歩みを振り返り、未来について語り合いました。野外では「ぐるぐるびわ湖フェス」を開催、びわ湖のニゴイと滋賀県産の無農薬農産物を使った琵琶湖フィッシュアンドチップスがデビューしました。

3月には集会の様子を琵琶湖博物館に展示しました。

[詳細]「未来のセンタク」で検索→特設サイトへ



琵琶湖フィッシュ&チップス、デビュー！



液体せっけん「ゆう」をお母さんが充填

●液体せっけん「ゆう」の製造体制の整備

リサイクル液体せっけん「ゆう」の製造方法の改良やマニュアルの整備などをすすめて、子育て中のお母さんが、製造や充填を担える体制づくりを進めました。

●BIWACCA

リサイクルせっけんの開発プロジェクト「BIWACCA」を、NPO 法人愛のまちエコ倶楽部と共同で進めました。オリジナルトートバッグや試作品のせっけんを返礼品にした寄付キャンペーンも実施し、122名の方々から合計36万9千円のご寄付をいただきました。



「おかえりティッシュ」と「ただいまロール」の共同購入で積み立てられた「一元基金」で、わたむきの里作業所(日野)に牛乳パックの回収作業小屋が建ちました！

<数字で見る 共同購入事業の成果>

リサイクル粉せっけん供給	3,437kg	←原料用廃食用油回収	8,484L
リサイクル液体せっけん供給	1,766L		
リサイクルトイレトーパー供給	10,553 袋	←原料用牛乳パック回収	318,084kg
リサイクルティッシュ供給	4,542 袋		

【住まいづくり】実践・体験イベント、続々！

身近な自然とつながる住まいづくりの一環で、雨水タンクや太陽熱温水器を、住まい手が自ら設置するワークショップを行いました。また、雨水タンク・太陽熱温水器・薪ストーブ等のあるお家での体験会を開催しました。



SHARE WILD PROJECT センターハウスで雨水タンク&太陽熱温水器設置ワークショップを開催（東近江市）



住まい手ご一家での雨水タンク設置（大津市）



綾さん宅での薪ストーブを囲んでの縫い物ワークショップ（草津市）



●住まいづくりワークショップ

雨水タンクや太陽熱温水器の設置のワークショップを SHARE WILD PROJECT（東近江市・湖東地域）のみなさんと共に開催しました。子どもも大人も一緒になって、住まいを自分で作る楽しみ、自然とつながる楽しみを共に感じていただくことができました。



太陽熱温水器のある西澤さん宅で子どもたちの育ちに関するお話し会（栗東）

●居心地のよい暮らし体験会

身近な自然とつながる住まいを取り入れた、綾さん宅（草津市）、秋久保さん宅（野洲市）、西澤さん宅（栗東市）を会場に、子育て、食、版画など、暮らしに関する多様な体験会を11回シリーズで開催しました。住まいづくりそのものにはそれほど興味のない方々にも、身近な自然とつながる住まいにお越しいただき、住まい手の話を聞いていただくことで、関心を高めていただくことができました。（滋賀県地域エネルギー活動支援事業補助金を活用）



生活クラブ生協雨水タンクツアー（野洲市）

●雨水&太陽熱の見学・学習会

ぐるぐるびわ湖プロジェクトでもご一緒している生活クラブ生協のびわ湖環境委員会のみなさんと連携し、雨水タンクの見学ツアーや、太陽熱の体験学習会などを開催させていただきました。参加いただいた方の中から、幾人も、実際に雨水タンクを設置していただくことができました。



滋賀県制作の動画「しがエネルギームーブメント！」で秋久保さん宅（野洲市）のリフォーム事例が紹介されました（ネット視聴可）

<数字で見る 住まいづくり事業の成果>

●小型雨水タンク（～300L）設置	7件	●大型雨水利用システム（1t～）設置	4件
●太陽熱温水器設置	7件	●その他リフォーム等工事	19件
●ワークショップ・学習会・体験会	17回		

【地域づくり】 みんなで学び みんなでつくる

これからの社会と暮らしについて、多様な人々が共に学び考える学びの場「てらすくらす」と、子どもたちの主体性を大切にする幼児教育を育み、広める活動「あおいそらともりのおうち」を新たに開始しました。



てらすくらす Class02「共感の経済でつくる未来」 講師 熊野英介さん（信頼資本財団）



Class02 会場の momo 庵は瀬田の唐橋そばの歴史ある建物



てらすくらす「Class03 私たち×公共の方程式」
@カフェ朴（彦根） 講師 宗野隆俊さん

●てらすくらすー暮らしに光。みんなの学び場

主婦、農家、経営者…多様な人が集って、自由な雰囲気の中で、成熟・少子高齢化時代の社会や暮らしのありようを学び考える「てらすくらす」を開講しました。中野桂さんからは経済、熊野英介さんからは経営、宗野隆俊さんからは公共について、それぞれ学びました。

【詳細】本誌後半「事業ビジョン」でご紹介します

●あおいそらともりののらうち

こども園そら（草津）、せた♪森のようちえん（大津・栗東）、ちいさいのらうち（守山）の三つの園の保護者や先生たちと「子どもの自主性や自由な育ちを大切にしたい」という思いでつながる新しい活動がスタートしました。8月には、乳幼児のいる子育て中の人びとを対象にした「おしゃべり会&手しごとワークショップ」を草津で開催しました。



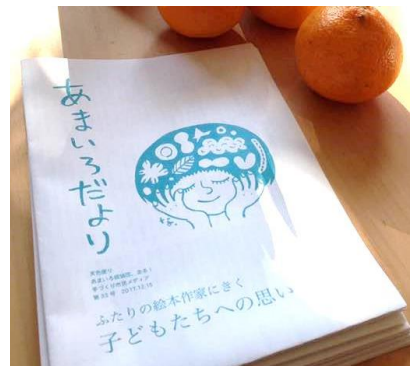
あおいそらともりののらうち主催のお話会「どうする？うちの子のようちえん」（草津市）



県立守山高校の生徒たちも川に入って作業

●高校生によるホタルの自生する川づくり

前年度に続き、株式会社みらいもりやま21、守山市などと連携し、県立守山高校の生徒によるホタルの自生する川づくりの支援に取り組みました。ホタルの幼虫が住みやすい川底の改良や護岸の改良など、様々なチャレンジに取り組みました。



手づくり市民メディア『あまいろだより』

●あまいろ探偵団

今年も季刊であまいろだよりを4号、発行しました。

【詳細】「あまいろだより」で検索→Facebookへ

<数字で見る 地域づくり事業の成果>

●てらすくらす講座	3講座・全15回	●小さな自然再生	1箇所
●あまいろだより発行	4号	●講演・研修受託	12件

これからの草の根自治にむけた展望

——ストック×贈与経済モデルとかけて住まいづくりと解く 根木山恒平（常務理事）

昨年（2017年）は、「琵琶湖のせっけん運動40周年記念運動」に取り組みました。また「てらすくらす」と題した学びのプログラムをスタートし、経済、経営、行政について学びました。さらに、「コミュニティ・オーガナイズ（CO）」というアメリカで体系化されたノウハウを学びながら、日々、実践しました。2018年のいま、“草の根自治の運動”を引き継ぐ私たち碧いびわ湖は、この先、どこに向かって進んでいくのか、議論をはじめのきっかけとして、記させてもらいます。

◆1年前に記したこと

ちょうど1年前に“草の根自治の運動”を引き継ぐ”というタイトルで、環境生協から碧いびわ湖にバトンタッチしてからの8年間のあゆみについて、おおむね、以下のようなことを記しました。

◎琵琶湖のせっけん運動は、ごくふつうの住民や地域団体、ムラが担ったところに特筆すべき点があった。また、当時、子育て中の父・母が「碧いびわ湖を子どもの未来へ」を合言葉に行動した。

◎碧いびわ湖になってからは、子育て世代の仲間づくりに注力してきた。自由な雰囲気でものびのびと子育てをし、かつ、社会問題にもドドンと正面きって向き合う女性たちに出会い、関係をつくり、3.11直後には「創発」するムーブメントも経験した。

◎手づくり市民メディア『あまいろだより』をとおして、丁寧な「対話」をつむいできた。子育てや教育でつながる県内のネットワークづくりになった。

◎「お金を出し合い、事業を運営し、利用する」（出資、利用、運営）という協同組合の理念の実践にチャレンジしてきた。

◎ひとり一人の「安心を実感できる暮らし」を起点に行動し（目的合理性）、その結果「命あふれる琵琶湖」が実現する（形態合理性）。そのために、着実に市民の力を組織していきたい。

して再確認したことの中に、せっけん運動は、3つのタイプの人の集まりを基盤として発展した運動であったということがあります。

ひとつは、当時の湖南生協——子育て中の女性を中心にした人の集まり。もうひとつが、社会運動にも積極的にコミットしていた労働運動の男たち。さらに、県内各地の村落など、地縁の人の集まり（当時の婦人会など）。さらに付け加えると、県知事のリーダーシップと熱意ある行政職員が、それらをつないで後押ししてくれました。

ところが、あれから40年が経ち、いま、振り返ってみると、当時の運動を支えたそれら3つの基盤がこの30年ほどの間に急激に力を弱めてきたことに気づかされます。

特に、1990年代以降、「新自由主義」と言われる政策や経営が推進されたことで、社会の中のおおおくのことがら、経済的な貨幣価値（数量）によって測定されるようになりました。生産性や効率が追求され、能力の有無によって評価する風潮が強まり、競争が過熱し、自己責任論が広まり、人びとは分断され孤立しました。その結果、生協や、労働組合、地縁組織を含めた、さまざまな自治組織が社会的な力を失ってきたと言えると思います。

また、私たち生活者ひとりひとりにとっても、日々、時間に追われ、生活の不安が高まり、個々の損得に執着せざる得ない状況で、友達や同僚、ご近所さんとの「あたたかなれあい」と言ったような光景も

◆消費するだけの存在で満足してよいのか？

昨年の「琵琶湖のせっけん運動40周年」をとお

すくなくなりました。

本来、自治を担う主体であるはずの生活者が、なぜだか知らぬ間に、サービスの消費者と言う経済行為の一方的な受け手（構図）に押し込められてしまったかのようです。

かつて、滋賀県内の地域社会を大きく動かしたせっけん運動——草の根自治を支えた人の集まり（社会関係資本）が力を失った現在、私たちは、何をどうすることができるのでしょうか???

◆環境ビジネス 40 年の上場企業経営者から

せっけん運動がはじまったのと同じ年(1977)に、環境ビジネスをスタートさせ、現在では、上場企業・アマタホールディングス株式会社（年商 45 億）の代表取締役会長兼社長である熊野英介さんは、「人間性が発揮しやすい“安心社会”の実現に向けて」と題した講義（てらすくらす）の中で、いまの社会の根本問題のひとつは「孤独」にあると言います。そして「孤独」の解消のためには関係性が重要であり、孤独の解放、すなわち人間関係こそが一番の価値になる社会がやってくると提起されています。実際に、アマタのビジネスと並行して、私財を投じた（公財）信頼資本財団において、「市場経済の基本である信用取引モデル」に代わって、「信頼関係にもとづく共感モデル」として“無利子・無担保・無保証”の事業資金融資（共感融資）を実践されています。

ところで、碧いびわ湖も、2009 年に環境生協から事業継承した際に、事業資金を環境生協時代の組合員をはじめとした心ある皆様からのご寄付（300 万円余り）と、“無利子・無担保・無保証”の長期借入金（1260 万円余り）によって「碧いびわ湖基金」を形成し、市民事業に取り組んできました。

また、熊野さんからは「自給経済×贈与経済×市場経済のベストミックスがたいせつだ」というお話もうかがいました。「贈与経済」というのは、例えば、「パーマカルチャー」という欧米で広がっている持続可能な暮らしづくりの運動では「ギフトエコノミ

ー」などと呼ばれています。「ギブ・アンド・テイク」という貨幣を介した信用取引（等価交換）とは異なり、人と人の信頼をベースにした「与え合い」（ギフト）の関係による経済のことです。例えば、ご近所さんが自家菜園でとれたお野菜を玄関先に置いていってくれる、といった話を耳にしますが、それも贈与経済のひとつですね。また家族関係もそうです——他人だった二人が「共に生きていこう」と関係を結び家族ができます。夫婦や親子の間では、家族の幸せのために、お互いのもてるものを与え合います。「どちらか一方が、どちらかにたくさん与えすぎている」とか、そういうことは本来、問題になりません。実際には、いろんな家族の形があり、与え合うバランスもいろいろあるでしょうし、時間の流れの中でも変化するでしょう。社会のなかで、家族の良好な関係がつづく、また家族以外でも人びとの信頼関係（コミュニティ）がふえれば与え合う関係（贈与経済）はいまよりも広がっていくはずです。

さらに、熊野さんの講義では、サルから人間へと進化する人類史にまで話が及びました。人間とは「家族」と「村落共同体（コミュニティ）」のように異なる複数の集団関係を共存させることができるよう社会性を発達させ、進化してきた生物だそうです。ちなみに、日本でも、1 万年もの長きにわたってつづいた縄文時代——160 人程度（ダンバー数）の村落での狩猟採集生活は、人類史上まれにみる「平和」な時代であったと言われていています。（←碧いびわ湖の仲間の中でも「平和」は重要価値のひとつです！）

昨年、「てらすくらす」の講座をとおして熊野さんと知遇を得たことで、私たちは、これまで 9 年間の実践のなかで感じてきたモヤモヤとした手触りにハッキリとした言葉をもらったような感動をえました。草の根自治を受け継ぐ碧いびわ湖の使命は、まさに、人びとが信頼によって関係し合い（組織化し）、共有化された価値（たいせつにしていること）をベースに、自分たちがのぞむ暮らしを実現するための力を

もつことです。カとは、消費者という経済行為の一方的な受け手から脱して、自ら社会サービスを供給できるようになることです。そして、それは市場経済モデルではなく、贈与経済を組み込んだ新たな事業モデルになることでしょう。そのことによって、私たちは「孤独」と「不安」の悪循環から抜け出し、ひとり一人が「安心を実感できる暮らし」を手にすることができるという希望を見出しました。

◆そもそも経済はワルモノではない

環境生協時代からの組合員である滋賀大学経済学部教授の中野野さんの講義では、「経済学」とは、単にお金を中心にしたカネもうけの仕組みの話ではなく、非市場経済（贈与経済など）もふくめた、人間のいとなみ全体を最適にするためのメカニズム（原理）についての学問だということを知りました。また、経済のとらえ方について、「風呂の浴槽」を例えにしたお話で、「フロー」（流れ）と「ストック」（蓄積）という概念の違いにもハッとさせられました。

ふだん、オフロにお湯をはるとき、私たちは、どこに注目しているでしょうか？蛇口から浴槽に注がれるお湯の量（フロー）と、たまってきたお湯の量（ストック）の両方を見ていると思います。浴槽にまだ少ししかお湯がたまっていなければ、蛇口を全開にしてたくさんのお湯を注ぐでしょう。その後、必要な量のお湯がたまれば、いったん蛇口は締めます。また、オフロに入って、こぼれ出て量が減れば、蛇口を開けて、減った分だけをおぎなうでしょう。この例え話で言うと、ニュースでよく耳にする経済成長率（GDP）というような言葉は、蛇口から流れ出るお湯の量（フロー）にあたります。他方で、たまってきたお湯の量（ストック）とは、例えば、私たちが住める住宅や、助け合える人間関係などのことです。GDPが小さくても、ストックがあって、私たちがそれを使用できるなら、案外それで足りるものかもしれません。私たちは、政府が発表する経済ニュースをうのみにしがちですが、実は「経済学を

学ぶのは、経済学者にあざむかれないため」というアイロニーに満ちた言葉も教えてもらいました。

さらに、中野さんからは、浴槽にたまったものの「量」だけでなく、「質」に注目することも大切というお話がありました。一見、たくさん貯まったなと思っても、実際には、浴槽の底にゴツゴツとした石ころがあって、私たちのオシリを痛くするかもしれません。量があっても、その質が悪く、私たちを苦しめるものなら、「無用の長物」でしかありません。

◆なぜかけ連想ゲーム！？

さて、ここで、ちょっと脱線して、なぜかけ遊びをしてみましょう。

「ストック × 贈与経済モデル」とかけて、

「住まいづくり」と解く。その心は？？？

100年間、住み続けられるゴミにならない住宅を、大工に習いながらみんなで力をあわせて建築する。その住宅は、たとえば、20年間×5世帯が住みつけるストック（みんなの住宅）である。このみんなの住宅を建てるために、すこし財産に余裕ある人たちが、「無利子・無担保・無保証」で資金を貸与する。その結果、5世帯は低廉な家賃で住むことができ、所得の多寡にしばられず、みんなのためになるけど給料の少ない仕事（例えば、碧いびわ湖のような）でも、不安なく暮らしていける。みんなで住宅を建てる作業を行うことで、人と人が自ずと仲良くなり、信頼関係が生まれる。こうした住宅を増やそうという信頼関係で結ばれた仲間が増える。自分の両親や、知り合いの資産家に声をかけて、資金を出してくれるように働きかける仲間が増える。大工は、自分の手で家を建てる技術に加えて、生活者を指導して、みんなで家を建てるノウハウも身に付ける。安定してくると、年間に建築する棟数も計画化されて、大工の仕事も安定する。「請負業者と購入者」という上下関係から解放され、大工も含めたみんなで共通の目的をもって家をつくるという関係が生まれる。年間棟数が定まり、過剰なクレームの心

配がなくなることで、コストダウンが進み、実験的な工夫もできるようになる…。

ああ、なんだか夢のようななぞかけ連想ゲームですね。実際できるのかな。(ん？隣で住まいづくり事業の担当者がなんだか張り切ってます～\(^o^)/

◆タウンの自治にみる人びとの「心の習慣」

さて、気をとり直して(笑)。てらすくらすの3つめの講座「行政学」では、滋賀大学教授の宗野隆俊さんが研究されているアメリカの市民社会の様子を学びました。1830年代の開拓時代のアメリカを見聞したフランス人のアレクシ・ド・トクヴィルが著した『アメリカのデモクラシー』は、いまも政治学の古典として知られています。当時のタウンの自治に見られた人びとの「心の態度」(まだ政府機能のないなか、私人同士が協力して自発的に公共のことに関わることを支えた心性)に着目し、自身の作品を創作されるように、丁寧に研究活動をされている宗野さんから感銘を受けました。

◆住宅供給とコミュニティ・オーガナイズング

また、1960年代の都市の再開発反対運動を起源にもつサンフランシスコの「コミュニティ開発法人」(Community Development Corporation/CDC)の事例研究にもたくさんの気づきをもらいました。都市のスラム街に再開発計画がもちあがったときに、それに対抗した人びとの運動が、時代を追うなかで、要求運動、政策提言という風に洗練され、最終的に、連邦政府の法律として「住宅開発供給という社会事業をコミュニティベースの非営利組織であるCDCが担い、財政的な支援を連邦政府が行う」という法制度が成立します。これにより、サンフランシスコに限らず、CDCを担い手とした中低所得世帯向けの集合住宅の建設がアメリカ国内で普及します。

また、CDCは、ベースとして慈善組織協会やセツルメント運動といったコミュニティベースの社会福祉系の非営利組織であることが多く、単なる住宅デベロッパーにとどまらず、コミュニティにおける住

民同士の懇親活動や、社会教育など、コミュニティにおける人びとのエンパワメント(コミュニティ・オーガナイズング)を担っているということです。さらに日本の非営利組織では敬遠されがちな、政治に対する要求運動も活発に展開されているそうです。

CDCが担う住宅供給事業とコミュニティ・オーガナイズングは、アメリカの人びとの運動の成果である制度を前提としていて、日本の私たちがすぐに同じように事業展開することはできません。けれど、ロールモデルとして多くの示唆を与えてくれました。

◆CO ⇒ 関係構築 ⇒ 共感/情動知能 ⇒ 人間理解

てらすくらすの3つの講座で学んだことを書いてきましたが、うっかり紙面がのこりわずかになりました。本当は、さらに、2016年の秋以降に学びはじめた「コミュニティ・オーガナイズング」の実践と、そこから派生したことを記すつもりでしたが、残念ながらすこしだけ最近の気づきを以下に書いて、続きはまた別の機会にゆずることにします。

そこでは「違いのある人間同士が、いかに関係を構築し、力をあわせ共に行動できるか」という草の根自治を体現するために、避けて通ることのできない基本的な社会関係作法の展望!というよりも実際にぶちあたっている現実、カベ、問題があります…。

同じ目的をもっているように見える人同士が、なぜか反目し、共に行動できない。なぜだろう?この問いについて、どうやら感情(情動)というものが影響しているようだ。私たちは、子どもの頃から、感情をじゃまもの扱いし、押さえ込んできた。けれど、その考え方は間違っていたようだ。感情を押さえこむと、それは無意識に抑圧され、結果的にコントロール不能な言動として暴発したりする。自分のモヤモヤした感情(情動)を感じとり、言語化して他者と交換する能力・共感する作法が必要です…(続く)

最後までお読みいただきありがとうございました。今後とも“草の根自治を引き継ぐ”碧いびわ湖のチャレンジにどうかご参加、ご協力、ご支援ください。

碧いびわ湖の事業概要

●原点はびわ湖のせっけん運動。力を合わせて循環・自治の暮らしをつくる。



1977年に起きたびわ湖の赤潮で広がった「せっけん運動」。その中から、当時の湖南消費生活協同組合が始めたリサイクルせっけん（原料の使用済み食用油の回収とリサイクルせっけんの供給）が碧いびわ湖の原点です。身近にあるものを生かす地域の循環と、身近な人と力を活かし合う自治を大切に、持続可能で心ゆたかな暮らしをつくり、広めています。

●一人一人の多彩な想いと力を、丁寧に紡ぎあって。



健全な湖や森では、多様な生き物がそれぞれに適した出番と居場所で暮らしているながら、全体も調和し、持続しています。碧いびわ湖ではそのあり方に習って、一人一人の多様な想いと力、命の尊厳を大切にしながら、信頼関係を丁寧に育む中から、創造的で持続的な暮らしを生み出します。

●どなたでも、今すぐに、ご参加・ご利用いただけます！

共同購入や住まいづくりのご利用、イベントへのご参加、寄付へのご協力などは、どなたでも（会員でなくても）ご参加いただけます。会員も随時募集中。詳しくはお問い合わせ下さい。

【お問い合わせ先】

特定非営利活動法人 碧いびわ湖

電話 0748-46-4551

FAX 0748-46-4550

〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦3

メール info@aoibiwako.org

HP <http://aoibiwako.shiga-saku.net/>

子どもと湖が笑ってる未来へ

碧いびわ湖